



水とリスク

水神の碑は、灌漑用水の確保や水運の安全、豊漁、水難除け・防水など、水に関するあらゆる願いを託された神様として日本全国で見られます。長崎では、井戸の近くに建立されていることが多く、主に飲料水の確保を祈願する目的があるとされています。江戸時代以降の人口増加により水の必要性が高まる中、切実な思いが込められたのでしょう。



水資源とグローバル課題



いわ し た あ き ひろ
岩下明裕
グローバルリスク研究センター長
教授

海、川、湖など世界中のさまざまな地域の水を同じ位相で語ることはできません。しかし、枯渇、汚染、利用など地域の事例研究は、他の地域の水を考えるうえで参考となります。私が専門とするボーダースタディーズ(境界研究)においても、国境を越える海や川の水と資源は重要なテーマです。例えば、海で囲まれた我が国にとって、海洋境界の保全と管理は喫緊の課題となります。排他的経済水域の線引きを巡る国家間対立、人為的境界に縛られない回遊魚などの水産資源管理、島への主権を主張して領海を広げようとする行動には戦争リスクも生じます。

水なしでは私たち人類はもとより生き物は生存できません。その水を語ることはプラネタリーヘルスの根幹といえます。資源管理リスクや戦争リスクにとどまらず、多くのリスクの要因となり得る水をさまざまな角度から考える文理を越えた長崎大学の総合的な研究の一端を、今号ではご覧ください。

長崎大学の挑戦

水の歴史

長崎の町を潤した

長崎の水不足を解消し 発展に導いた先人とは

木村直樹 多文化社会学部 教授

1571年の開港を機に、貿易都市として発展した長崎の町。現在の浜町一帯は人口が増加、それによって大量の水が必要となりました。しかし低湿地帯を埋め立てた土地では、井戸を掘削しても良質な水は出ません。その後も人口は増え続け、慢性的な水不足に悩まされた市中の人々や出島の商館員たちは、水売りから買った水や丘陵地に出る水をもらって飲んでいました。

この状況を打開しようと奮起した人物が、長崎で廻船問屋を営んでいた倉田次郎右衛門です。倉田は町の中心部を流れる、中島川上流の銭屋川の伏流水に着目。私費を投じて川の中に堰を築き、井筒を積み上げることで、勢よく水を吹きあがらせることに成功。その水を水車で地上に引き揚げました。その後水道工事に着手。私費が底をついた時は長崎奉行の支援を受けるなどして、1673年に完成に至ります。50以上の町に水を行き渡らせた水樋は、「倉田水樋」と呼ばれるようになりました。

幕末以降、長崎に外国人居留地が

造られると、また新たな問題が発生しました。諸外国から人や物が流入すると共に伝染病が流行したのです。中でも、1885年に長崎で流行が始まったコレラは、全国で約10万人の死者を出すほど猛威を振るい、衛生環境の改善が喫緊の課題となりました。

それを受け1891年、長崎市内に本河内高部堰堤と本河内浄水場が創設されました。計画当初は受益者の費用負担が大きいことから、半数以上の町が反対したなど苦難の連続だったようですが、これが横浜、函館に続く我が国3番目の近代水道となったのです。

このように都市の発展には水の問題がつきものです。いち早く開港した長崎の町は水資源に恵まれず、どのようにして水を確保し供給するのか、早い時期から問題と向き合ってきた歴史がありました。これは、明治時代に農村から海軍鎮守府として都市化した佐世保も同様でした。

※水樋…水を通す管



長崎市水道資料室(長崎市田中町)に展示されている、倉田水樋の模型の撮り(資料)と呼ばれる部分。

長崎の感染症の話はこちらから

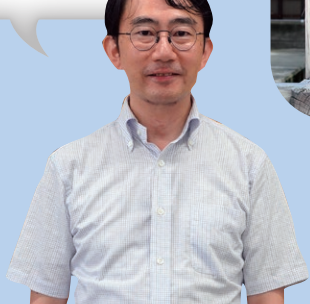


完成当時の本河内高部水源地写真。(長崎歴史文化博物館蔵)



文教キャンパスに近い住吉の井戸でも、水神様が祀られています。

長崎の町を歩いていると水神様を見かけます。背景には、水と向き合ってきた長崎の歴史があるのでしょう。



木村直樹 教授

倉田水樋「木樋」

現存する木樋。(長崎市水道資料室所蔵)



水の流れを可視化する

環境保全の道しるべに

環境リスク

近年、世界的に関心が高まっているPFAS(ピーファス)による地下水汚染問題。PFASは焦げ付きにくいフライパンや防水衣類などに使われてきましたが、自然界では分解されにくく、産業活動を通じて環境に広がり、地下水や水道水が汚染される危険性が懸念されています。このような有害物質が地下水から検出された時、健康不安だけでなく、風評などの二次被害にもつながりかねません。

利部慎准教授は雨が地中に浸透してか

先日は五島列島最北部の小値賀島に渡り、たくさんの古い井戸から地下水を採取しました。

利部 慎 環境科学部 准教授



ら、地下水として流れて地表に湧いてくるまでの年月を測定する研究が専門です。フロンや炭素など、地下水に溶存する物質濃度を指標にしながら、その水が“いつ降った雨なのか”を推定しています。“水の年齢”を調べるこの研究が、地下水の汚染問題や保全対策にどのように貢献しているのでしょうか。

「地下水に浸透した物質は私たちの目には見えません。例えば汚染された地下水の年齢が100歳だった場合、汚染源を取り除いたとしてもその後100年続く問題です。その井戸は諦めて新しい井戸を掘るなど、対策が取れるでしょう。また逆に若い水だった場合、原因物質を取り除いてしまえば、すぐに水質は回復してくれるはずです。つまり地下水の入れ替わる時間軸を可視化することで、どのくらい汚染の影響が続くのか推定できるのです。不安が払しょくされ、より正確な対策と判断につなげることができるでしょう。実際に大規模な半導体工場が進出した熊本では、地下水に汚染物質が入った場合の想定策と

※PFAS…主に炭素とフッ素からなる化合物で、水や油をはじく特性などを持つ。現在、生産は停止されている。

ミクロな汚れを取り除く

膜を使った高度浄水技術



通常はロール状になった膜が多い中、汚れを除去しやすいよう封筒状に改良した膜を使用。フィルター、メッシュ、不織布などが層になっています。フィルターの孔のサイズは、1ナノメートル(1mmの100万分の1)未満。肉眼では見えません。

膜ろ過による、高度浄水技術の社会実装に取り組んでいる藤岡貴浩教授。“膜”とは、よく家庭で使われているコーヒーフィルターの目を細かくしたようなもので、孔が極端に小さいナノろ過膜や水以外の不純物を透過させない逆浸透膜を使用。膜の開発や改良を通じて、ミクロな不純物を取り除く技術を開発しています。

国や地域によって、課題とされる水の問題は千差万別です。例えば、日本から近い東南アジアに目を向けると、水道水をそのまま飲める国はほとんどありません。藤岡教授の研究室では、地球規模課題対応国際科学技術協力プログラム(SATREPS)が推進するプロジェクトの下、ベトナムを対象にした低コスト型高度浄水処理技術の研究を進行中。今年10月には、港湾都市・ハイフォン市で開発技術の実証実験をスタートさせました。

「ベトナムの河口域では、河川水を浄化した水が水道水として使われています。し

衛生リスク



島原の湧水年齢を調査。およそ30年かけて地表に湧いてくるものが分かっています。

して、私の研究成果が活用されています」。県内外のフィールドで、地下水の調査に取り組む利部准教授。名水で知られる、島原の湧水の年齢も計測済みだそうですね。「はい、地域の皆さんはふるさとの水資源をととても大切にされていますが、どの山から何年かかって流れてきた水なのか理解できていません。普段飲んでいる水がなぜ美味しいのか、科学的なエビデンスに基づいて理解を深められれば、ますます愛着がわき、環境保全に対する関心も高まるでしょう」。

今後は社会実装の促進を目指して、企業との連携をさらに強化していきたいですね。

藤岡 貴浩 工学部 教授





水力発電で得られた研究成果を温泉熱発電の研究プロジェクトにも展開しています。

さききそういち
佐々木壮一
工学部 助教

持続可能な発電の実現へ

コンパクトな水力発電装置

再生可能な自然エネルギーの安定供給が求められる中、水資源が豊富な日本国内では、大規模な水力発電施設が建設されてきました。一方、流体工学の研究が専門の佐々木壮一助教が着目したのは、未利用の農業用水路の流れ。農業用水路に設置できる、直径約3メートルの胸掛け水車(水車の中央あたりで水を受ける水車)を活用した、小型水力

発電装置を企業と共同開発しました。佐々木助教のお話です。
「持続可能という点においても、例えば工事費の負担が大きい100kW級の小水力発電所をつつ造るという策だけでなく、10kW級の発電装置を農業用水路に10箇所設置することも有効と考えました。平坦な用水路を流れる水の運動エネルギーは小さいため、落差1.5メートルのより大きな位置エネルギーの回収を可能にする胸掛け水車を開発しました。この胸掛け水車は灌漑期の流量で10kW発電することができ、一般家庭およそ25世帯分の消費電力を持続的に賄うことができます」。

米どころで知られる、新潟県南魚沼市で実装されているこの小型水力発電装置。水車の問題点とされていた、除塵対策も考慮されています。

「枯葉のような異物が水車に堆積すると発電量が低下します。発電のために用水路の流量を変えることはできないので、その代わりに水車の羽根車が前後上下に動く機構を考えました。例えば大雨が降った時には羽根車を上げ、逆に流量が少ない時は羽根車を水面に近づけ、安定的にエネルギーを回収できるよう制御します。この機構を活用すればゴミを取り除く作業も少なくなり、メンテナンス費用の削減につながります」。

古くからさまざまな用途で活用されてきた水車。コンパクトかつ進化した発電装置でエネルギーを生み出す一方、大規模な施設に比べると回収できるエネルギーは限られています。このため、ハウス農業のような特定事業の電力需要をこの小型水力発電装置で供給することが検討されています。

企業と共同で行った実証実験の様子。実寸の4分の1程度の模型を製作して、試験が実施されました。

エネルギー
リスク

新潟県南魚沼市の農業用水路で実装されている小型水力発電装置。



線状降水帯の発生に備える

観測データから見た課題点

年々深刻化する異常気象。大規模災害の発生リスクが高まる中、“線状降水帯”に関するニュースを頻繁に耳にするようになりました。

線状降水帯は次々と発生した積乱雲が列を成して停滞し、同じ地域に強い雨を長時間降らせる現象です。気象庁では、予報精度を上げるべくプロジェクトを

推進。線状降水帯の発生数が多い九州を中心に集中観測を実施するというもので、地球の水を研究対象とする水文学が専門の瀬戸心太教授もプロジェクトの一員です。JAXAとの共同研究ということですが、どのようなデータが得られているのでしょうか。

「工学部棟の屋上に設置した観測機器で、線状降水帯の発生時の雨量と雨粒の大きさを観測しています。今のところ2022年のスタート以降、本学の上空一帯に線状降水帯が発生したのは1回のみですが、データを分析したところ、一般的には強い雨が1時間に100ミリの雨量であるのに対して、瞬間的に180ミリの雨量を計測しました。一方、気象庁と国土交通省が各地に設置した雨雲レーダーの情報は、1時間に数十ミリ程度でした。なぜ差が生じたのか考えました。まず雨雲レーダーは、雨雲の動きを見るという点で有力な情報を得られま

すが、雨量を測る精度はそれほど高くありません。また、そもそも長崎市内には雨雲レーダーが設置されておらず、福江島、福岡、熊本のレーダーが計測しています。距離が離れているものを見るのですから、当然精度は下がります。線状降水帯に限らず、正しい気象情報を広く発信するためには、現地に設置した計測器の情報と雨雲レーダーの情報を照らし合わせるといった対策が必要でしょう」。

自然現象を予測する技術は未だに日進月歩。まだまだ改善の余地があると瀬戸教授は言います。

「コントロールできない異常気象にどのように備えるのか、予報スキルの向上など課題がある中、私としてはデータを積み重ねていくという点で、今後も貢献していければと思っています」。



工学部1号館屋上に設置されている降雨観測機器。①は上空に雨粒があると電波が反射されるマイクロレーンレーダー。②はセンサーの上に落ちた雨粒を計測するディストロメータ。2年前、新たに雨粒の大きさを測る装置③が追加されました。常時これらの機器から、データが送られてくるシステムです。

災害リスク

雨粒の大きさの情報も、レーダーによる雨量の観測を正確に行うために必要です。

せと しん た
瀬戸心太
工学部 教授



生態系リスク

魚が快適に暮らせる

良好な水際環境を目指して

“三面張りコンクリート”という言葉をご存じでしょうか。河川の床面と側面がコンクリートで固められた状態を指すもので、特に長崎では、1982年の長崎大水害の復旧工事において大幅に増えました。洪水対策としては有効ですが、環境が単調になるため、魚類がほとんど生息しない状況になっているとか。全国的にも問題視され、自然河川に戻す取り組みが進められている一方で、長崎では改善が進んでいません。それはなぜでしょうか。河川工学、生態学が専門の田中亘助教に聞きました。

「長崎の場合、三面張りコンクリート区間が非常に多く、すべてを改修することは現実的ではありません。そこで、既存の三面張りコンクリート区間をそのま

ま活かしつつ、追加施工によって、自然河川に近い環境を創出することを目的に研究を進めています」。

具体的には、どのような実験が行われているのでしょうか。
「もっとも有効と言われている“バープ工”と呼ばれる水制を、浦上貯水池の上流に設置しています。河川の流れに対して、木製のバープ工を上向きに設置することでそこに土砂が堆積して、植物が生えてくるという仕組みです。設置地点より上流の滑石付近の河川は、コンクリートを砕き元の自然環境がよみがえっていますので、貯水池から魚が遡上できるように改善できればと考えています。しかし治水上の関係で小さいバープ工しか設置できず、思うような成果が得られていません。今後は、木製からメッシュ状のバープ工に切り替えて、そこに植生を施す方法で改善を試みる想定です」。

生き物が生息できる豊かな環境整備。それは人間にとっても、自然と調和した暮らしやすい社会を取り戻す、一つの方法になるのかもしれません。

※水制…土砂や水の流れを制御し、治水や土砂堆積に対応するために設置される構造物。

治水性能を向上させつつ、自然に配慮した川をつくるための基礎的な研究に取り組んでいます。

たなか わたる
田中 亘
工学部 助教



防災をもっと身近に!

学生ボランティアサークル

長崎Sip-S

災害に備えるための防災学習と、被災地支援を軸に活動している長崎Sip-Sは、本学の学生11人が在籍するサークル団体です。代表の奥野未来さんに話を聞きました。

「個々の専門分野と結びつけながら、防災について学んでいます。例えば僕は小学校の教員を目指しています。避難訓練時に教員がどのような動きをしているのか調べたり、ハザードマップを確認したり、メンバーそれぞれが学んだことを共有し、サークルで開催する防災イベントの中で学生や地域の皆さんに広める活動を行っています。また被災地支援も行っていて、今年9月には能登半島に9人のメンバーを派遣しました。

現地の方々との交流の中で、被災時の状況や対策について学んできました。今後はほかの地域にも、活動範囲を広げる予定です」。

今年6月には、本学の学生を対象に第3回防災フードフェスタを開催。気象防災アドバイザーによる講演やクロスロードゲーム(防災シミュレーションゲーム)、日常的に取り組める備蓄方法「ローリングストック」を基にメンバーが実際に料理した防災食のレシピ動画を見るなど、充実した1日になったようです。

知見を深め地域にアウトプットする、学生らしい取り組みの根底には、防災をより身近に感じて欲しいと願う思いがあります。



バープ工をメッシュ状の素材に切り替えた状態。事前に植生を施すことで土砂の流出を防ぎ、植物の生長を促します。



滑石付近では、もともと三面張りコンクリートだった河川が再生されています。

小学生の時に防災意識が高い先生に出会いました。地元で豪雨災害を経験したことも、防災に興味を持つきっかけになりました。

おくの みらい
奥野未来さん
教育学部 2年



2019年に解散した前団体の名称と理念を引き継ぎ昨年4月に再結成。現在は6学部の学生が在籍。メンバーで企画、立案した防災イベントの開催や長崎県内の防災イベントへの参加に加え、被災地ボランティアの派遣を行うなど、精力的に活動しています。写真は昨年8月に開催した防災研修の様子。



サークル
応援サイトは
こちらから



文教地区など大学周辺の急傾斜地が示されているハザードマップ。イベントでは、土砂災害の発生リスクが高い箇所の確認や実地調査を行った結果を発表します。

Saiyu Fund

[西遊基金]

平和だからこそ
スポーツを楽しめる!!

スポーツを通じて大学生と交流

小中学生向けのサッカー、バスケット、陸上クリニックを行いました。

トップアスリートが語る
「平和 × スポーツ」徳永悠平さん(元サッカー日本代表)、
渋谷陽子さん(元陸上日本代表)による
特別トークセッション

平和とは何か



RECNA と語る

RECNA(核兵器廃絶研究センター)の
樋川和子教授による
小中学生向け平和セミナー

はねびあ



龍踊部



書道部

文化の力で平和を発信

平和を語るスタジアム

「ピースマッチ2025」

長崎で開催!

2025年8月20日、長崎大学と長崎大学サッカー部の主催による「ピースマッチ2025」を、長崎スタジアムシティで盛大に開催しました。

被爆80年の節目に、スポーツと文化を通じて平和の尊さを次世代へ伝えるこのイベントには、約700名が参加。

スタジアムは笑顔と真剣なまなざしに包まれました。

※本イベントは、西遊基金からの支援により行われました。

スポーツと文化の力で、
世界に平和を届けたい

学生が自ら考えた平和宣言



参加した学生たち

長崎 × 広島の大学生の平和宣言

広島大学との
“平和の一戦”

サッカー・バスケットの平和親善試合

スポーツができる
環境を世界中に

内村航平氏が登壇

金メダリスト×大学生×高校生
トークセッション詳細はサークル
応援サイト
をご覧ください!

ご支援ありがとうございました!

CROWDFUNDING被爆80年、被爆の記憶を未来へ
長崎大学の貴重な歴史資料を守りたい被爆80年を契機として、本学が所蔵する貴重な被爆資料の保存を目的にクラウドファンディングを実施しました。
本プロジェクトには、全国各地の皆さまから温かいご共感とご支援を賜り、心のこもったメッセージも多数お寄せいただきました。
ここに、いただいたメッセージの一部をご紹介しますとともに、すでに始まった修復について報告します。被爆から80年という大きな節目を迎える長崎において、
長崎大学が果たしてきた平和発信の役割は計り知れません。過去を風化させず、未来へと希望をつなぐ皆さまの取り組みに、心から敬意を表します。このクラウドファンディングを通じて、次世代を担う若者たちの学びや挑戦、そして平和への強い想いが、国内外へ広く届くことを願い、ささやかながら応援させていただきます。(長崎県 男性)

被爆地長崎の大学である貴学がこれまでも重要な取り組みを数多く地道にされてきていることに敬意を感じます。今回、こういう取り組みをされることに、卒業生の親として僅かですが参加したいと思いました。頑張ってください! (神奈川県 男性)

ささやかな額ですが、お役にいただければ幸いです。このプロジェクトにより、原爆の惨禍を生きのびられなかった方、生き残ったために逃げることも許されず、過酷な状況で使命を全うしなければならなかった方、被爆された全ての方々の想いが報われ、そして後世に語り継がれることを願っております。ご成功をお祈りします。(宮城県 女性)

原子爆弾による被害資料の保存が、世界中の人々に平和の尊さを伝える力になると信じています。私も微力ながら応援させていただきます。(奈良県 女性)

記録を残すこと、物を残すこと、記憶を風化させないことが大切です。この企画に協力いたします。(東京都 女性)

原爆被災の経験を後世に残す大変重要なプロジェクトとっております。多くの人に見て、感じてもらい、原爆を二度と使用させないため、よいものを作ってください。応援しております。(大阪府 女性)

10/10

血染めの白衣のカビ調査が始まりました

皆さまからお寄せいただいた声を胸に、今後も資料の保存・修復に取り組んでまいります。
作業の進捗については、プロジェクトページの活動報告にて随時お知らせいたしますので、引き続き温かく見守っていただけますと幸いです。
なお、クラウドファンディングは終了いたしました。長崎大学では本事業へのご支援(寄附)を引き続き受け付けております。
ご関心をお持ちの方は、クラウドファンディング担当(095-819-2155)までお気軽にご連絡ください。活動報告は
こちらから

寄附者の声

“託す”という寄附のかたち

西遊基金には、各方面から温かいご支援をいただいております。今回は、長崎大学の名誉教授の先生より、西遊基金へのご寄附についてのお話を伺いましたので、ご紹介いたします。
長崎大学で40年近くにわたり教鞭を執られた先生は、「寄附とは“託す”ものであり、具体的な使い道について特別な希望はありません」と語られました。在職中はさまざまな役職を経験され、学生たちにも多く助けられたと振り返られています。
現在は、寄附の使途よりも、長崎大学の教育・研究に関する最新情報を大学ホームページでチェックしたり、構内を散歩したりしながら顔なじ

みの教職員と語らう時間を楽しみにされているそうです。

「学生たちの活躍を見るのが何よりの楽しみ」と話される想いに応えるべく、西遊基金は、未来を担う学生たちのために、いただいたご寄附を大切に活用させていただきます。

大学への支援はこちら

卒業生イマナニシテル!?

卒業生の思い出や現在の様子を知ることができる「卒業生イマナニシテル!」が「Web Choho」限定で公開されています。皆さまのお知り合いが登場するかもしれません。また、記事投稿も随時募集しております。ぜひご覧ください。

<https://choho.nagasaki-u.ac.jp/tag/alumni/>

西遊基金

「西遊基金」は、長崎が長年にわたって培ってきた個性と伝統を基盤に、地域の発展から地球規模の課題まで、さまざまな問題を解決するための傑出した人材育成を目指した、長崎大学独自の修学支援と、教育・研究の幅広い支援を目指した基金です。
TEL:095-819-2155



喜助うどん 児島正吾さん

思い出の場所
募集中!



細くて丸い麺は長崎のスタンダード

創業1976年、先代が陶器店の一部を改装してうどん店を開業しました。2014年にリニューアル、そして2019年に新大工町商店街の通りから国道沿いへ移転を経て、来年開業50年の節目を迎えます。現在は、居酒屋としてもご利用いただけるようになりましたが、昔ながらの細くて丸い麺はそのまま、カツオ、サバ、イワシをブレンドして作るダシも、父の代から変わっていません。なかなか他所では食べられないうどんだと思いますので、長崎を離

れている卒業生の皆さんにも、懐かしく食べていただけるのではないのでしょうか。

長大生の皆さんには、ホールや厨房でアルバイトを頑張ってもらっています。家族経営の店ですから、ずっと自分の子どものように接してきました。長く勤めてくれた学生さんが卒業する時には、小旅行に連れていくんですよ。湯布院や呼子など近場ではありますが、お互いにとって楽しい思い出になればと思っています。

私は、新大工町商店街振興組合の理事長を務めています。

経済学部 の皆さんには、フィールドワークの場として商店街を活用していただくことも多く、密接な関係を築いてきました。また、今年の長崎くんちでは新大工町が踊町を務め、山口県出身の薬学部^{ねびき}の学生さんが、根曳の一員として参加してくれました。幼少期から見てきた長崎くんちに関わるために、



長崎ならではの細くて丸い麺の上にたっぷり具材がのった喜助うどん。



新大工町商店街の通りにあった頃の店舗。

長大進学を決断したそうです。練習後には、仲間たちと一緒にうどんを食べに来てくれました。

懐かしい味わいや長崎くんち見物など、卒業生の皆さんにとっても、大学時代の思い出はたくさんあるでしょう。ぜひいつか長崎に帰ってきてください。



国道沿いに移転後も、地域の皆さんに変わらず愛されています。

アンケートのご協力をお願い

以下を明記の上、広報紙Chohoへのご意見・ご感想をお寄せください。

- ①面白かった記事 ②本紙に対するご意見・ご感想
- ③今後取り扱ってほしい内容
- ④長崎大学からの情報発信全般についてのご意見・ご感想
- ⑤本学との関係 ⑥年齢 ⑦氏名(ふりがな)
- ⑧郵便番号 ⑨住所 ⑩電話番号



◎はがき：〒852-8521 長崎市文教町1-14 長崎大学広報戦略本部 宛て

◎FAX：095-819-2156 ◎メール：kouhou@ml.nagasaki-u.ac.jp

◎募集期間：2026年2月末まで

読者プレゼント

アンケートにご協力いただいた皆さまの中から、抽選で10名様に、長崎大学オリジナルQUOカード(500円分)をプレゼントします。賞品の発送は2026年3月を予定しています。当選者の発表は発送をもって代えさせていただきます。



Choho

直接送付サービス
受付中!



広報紙Chohoはその多くを、各学部同窓会様の会報誌送付の際に、直近の号のみ同封してお送りしています。そのため、読者の皆さまには必ずしも毎号お届けできないケースがあり、「前号も読みたい」、「定期送付をしてほしい」といったお声をいただいております。そこで、ご指定の住所へChohoを直送するサービスを行っています。

上記サイトへアクセスしていただき、ご登録をお願いいたします。皆さまのご利用をお待ちしております。

送付先変更のご連絡はこちらまで



編集後記

水は、私たちの命の源であり、社会の営みを支える基盤でもあります。しかし、その姿や抱える課題は地域によって異なります。

今号では、長崎大学が取り組む「水」にまつわる多様な研究を通じて、環境・衛生・エネルギー・生態系・災害といったリスクに向き合う姿を紹介しました。

地下水の流れを可視化する研究、膜技術による浄水の高度化、小型水力発電による持続可能なエネルギー供給、生き物が暮らせる水辺環境の再生、そして線状降水帯に備える観測技術。それぞれの研究は、地域課題の解決にとどまらず、世界の水問題への応用可能性を秘めています。

また、長崎の歴史を振り返れば、水不足に悩みながらも創意工夫で乗り越えてきた先人たちの姿が浮かび上がります。水と向き合うことは、地域の未来を考えることでもあり、地球規模の課題に向き合うことでもあります。

文理を越えた総合大学としての強みを活かし、長崎大学はこれからも「水」を通じて、持続可能な社会の実現に貢献していきます。読者の皆さまにも、ぜひこれを機に、身近な水から世界について考えていただければと思います。

(広報戦略課 吉野雄介)

長崎大学SNSサイト



X



Facebook



Instagram



YouTube

